



a. 調査区全景 (北西から)



b. 第2トレンチ全景 (南から)



a. 中世大溝Ⅰ（東から）



b. 中世大溝Ⅱ（南から）



a. 第1トレンチ全景（東から）



b. S D-202、S K-105 遺物出土状況



a. SD-103完掘、SK-113検出状況



b. SD-202、203 完掘状況（北から）



a. SD-204 (北から)



SD-204 第8層遺物出土状況



a. S D - 204 第 14 層遺物出土狀況



b. S D - 204 下層遺物出土狀況



a. SD-102 第2層遺物出土状況



b. SD-102 第3層遺物出土状況



a. SD-1203 (東から)



b. SD-1203 第4層遺物出土状況



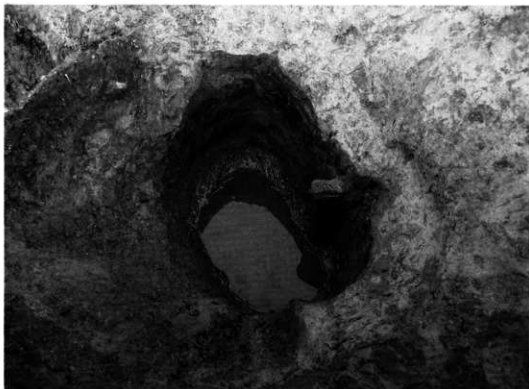
a. SK-1101 第 4 層遺物出土狀況



b. SK-1102 最下層遺物出土狀況



a. SK-1103 第4層遺物出土状況



b. SK-1104 (西から)



a. SK-105 (南東から)



b. SK-105 上層遺物出土状況



a. SK-104 窰出土狀況



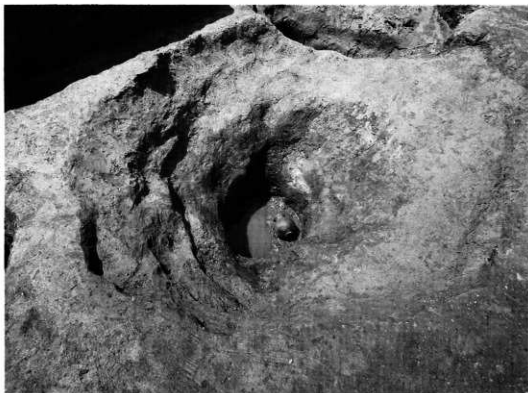
b. SK-114 水差形土器出土狀況



a. SK-101 (南から)



b. SK-101 中層遺物出土状況



a. SK-102 第12層広口壺出土状況



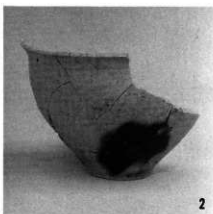
b. SK-102 中層遺物出土状況



a. SX-202 土器検出状況

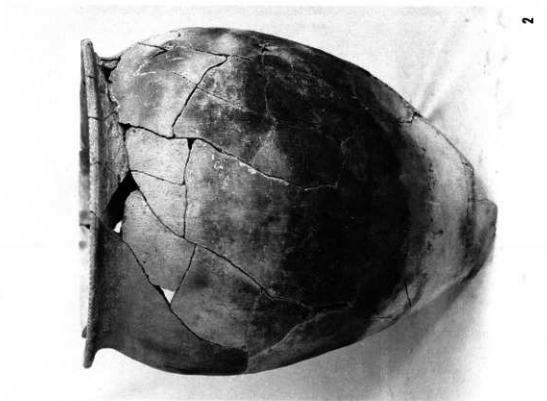
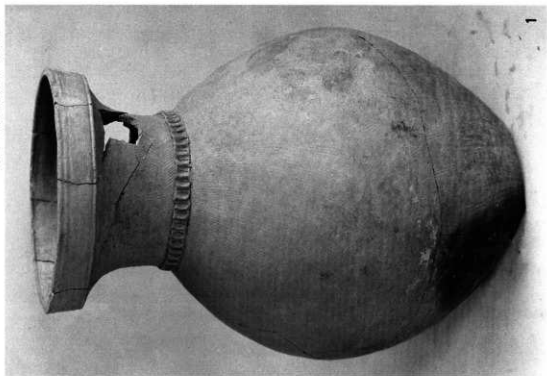


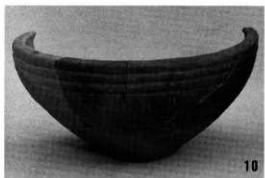
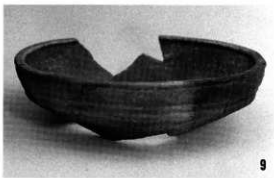
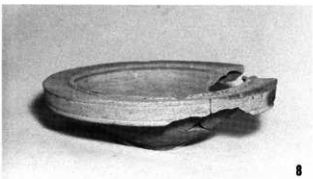
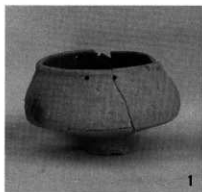
b. SX-101 壺検出状況



1・2-SK-1103 第4層出土土器、3-SK-114 出土土器、4~7-SK-105 出土土器(1/2)







SD-204 出土土器 (片)



SD-204 出土土器 (場)



1



2



3



4

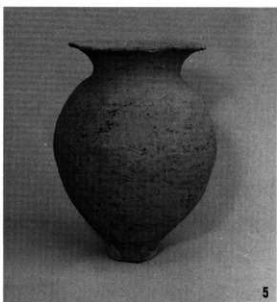


5

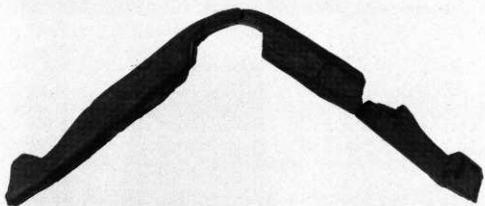


6

1-SK-101 上層出土土器、2-SK-102 中層：2~4、6、下層：5 出土土器 (3/4)



1~8 - SD-102 出土土器 (各)



1



2



3



4



5



6



7

1・4・5・6-用途不明品 2・3-木庖丁、7-木製紡錘車(片)
1・3~7-SD-204出土 2-SK-1104出土



1—平鍛未成品、2・3—原材
1~3—SK-1103 第4層出土 (1/6)



1

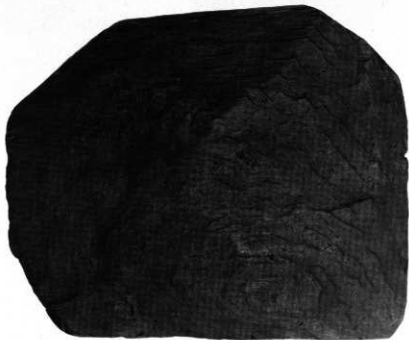


2

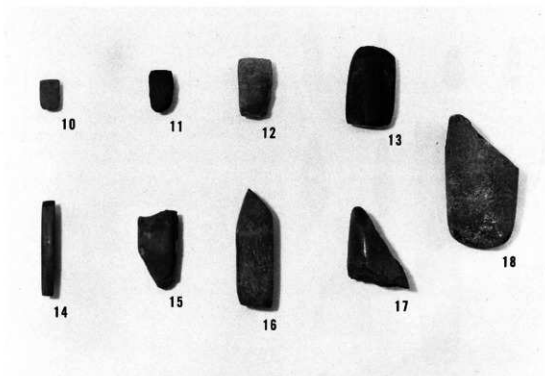
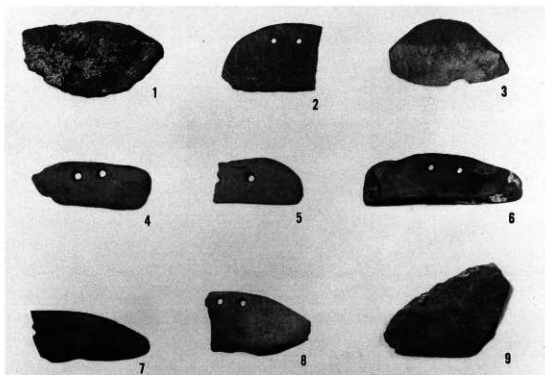
1—平織—SK—1102 最下層出土 (3/4)
2—狭織—SK—1101 第 4 層出土 (3/4)



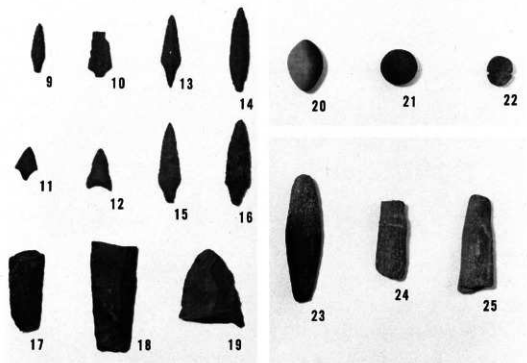
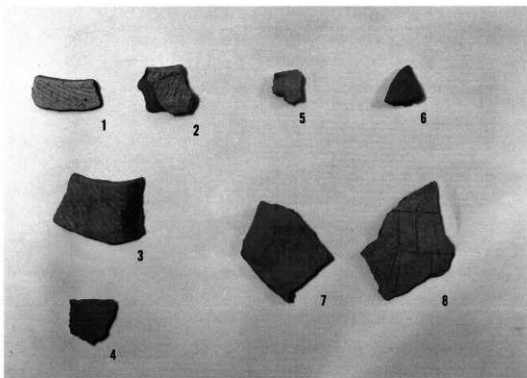
1



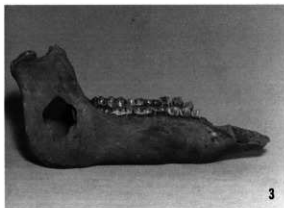
2



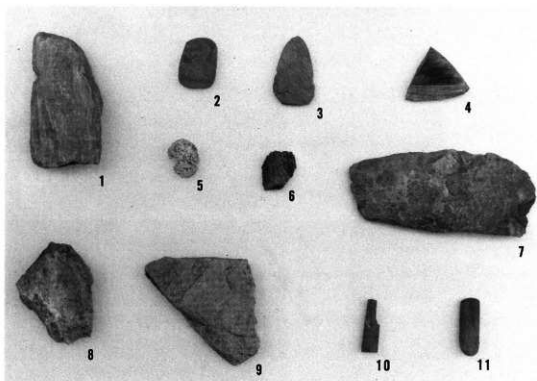
1~9-石磨丁、10~18-石斧 (1/4)



1～4－搬入土器、5－イノシシ彩土製品、6－鐔形土製品、7・8－絵画土器
9～16－石鏃、17～19－石槍・石剣、20・21－投弾、22－用途不明土製品
23～25－用途不明石製品 (3/5)



1~4, 8・9-イノシシ、5・7-タヌキ、6-イヌ (1/2)
1~3, 5~7・9-SD-204下層、4-SD-203最下層、8-SD-1203第4層



第 8 表 第 16・18・19 次石材一覽表

	名 称	調 査	遺 構	石 材
1	砥 石	16 次	SX-102 黒粘Ⅱ	点 紋 片 岩
2	扇平片刃石斧	16 次	SD-105	玄武岩質凝灰岩質片岩 A
3	磨製石鏃	16 次	SX-102 黒粘Ⅱ	玄武岩質凝灰岩質片岩 C
4	石 庖 丁	16 次	SX-102 黒粘Ⅱ	泥 質 片 岩 B
5	自 然 石	16 次	SD-103	流紋岩質溶結凝灰岩
6	石 斧	16 次	SX-102 黒粘Ⅱ	玄 武 岩
7	石庖丁未成品	16 次	SD-106	玄武岩質凝灰岩質片岩 B
8	石庖丁石材	16 次	SD-101 黒粘	流 紋 岩
9	"	16 次	SD-101 黒粘	黒 雲 母 流 紋 岩
10	棒状石製品	16 次	SD-101	石 英 閃 綠 岩 質 砂 岩
11	"	19 次	中世大溝 I	泥質ホルンフェルス

昭和58年度

黒田大塚古墳

第1次発掘調査概要

例 言

1. 本書は山原本町教育委員会が昭和58年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡山原本町大字黒山所在、黒田大塚古墳の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導の下に、同研究所と本教育委員会との合同で調査をおこなった。
3. 調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては豊岡卓之、山田邦和、外山晃久、大沢宣、水ノ江和向(同志社大学)、松田祥子(大谷大学OB)、飛田立史(北京大学留学生)の諸氏に協力して戴いた。
4. 調査にあたっては下記の方々より御教示、御協力を賜った。記して感謝します。
同志社大学森浩一先生、橿原考古学研究所石野博信、泉森皎、菅谷文則の諸氏。
5. 本概報はⅠ～Ⅲを藤田、Ⅳを河上が執筆し、藤田が編集をおこなった。

本 文 目 次

Ⅰ. はじめに	1
Ⅱ. 古墳の立地と現状	1
Ⅲ. 調査の概要	3
(1). 第1トレンチ	3
(2). 第2トレンチ	4
(3). 第3～5トレンチ	4
(4). 出土遺物	5
Ⅳ. まとめ	7

I. はじめに

黒田大塚古墳は奈良盆地のほぼ中央、寺川と飛鳥川に挟まれた沖積地に立地している小型の前方後円墳である。この古墳の北方には小型の前方後円墳などで構成される三宅古墳群が存在している。これらの古墳や低地の古墳の多くが原形を著しくそこなっている中で、黒田大塚古墳は良好に墳丘を残している古墳として認識されていた。このようなことから学術的にも重要な古墳であり、昭和58年3月15日には県史跡に指定された。

県史跡指定とともに田原本町では本墳の整備計画を立案した。本墳を保存整備するにあたって必要な資料を得るために発掘調査が計画された。また、これらとは別に町では本墳の北側にテニスコートを作ることが既に計画されており、この二つのことが契機となり発掘調査を実施した。

発掘調査は昭和58年7月20日～同年9月6日まで要した。調査に際しては県立橿原考古学研究所の御指導のもとに、現地調査を同研究所々員河上邦彦・田原本町教育委員会藤田三郎があたった。

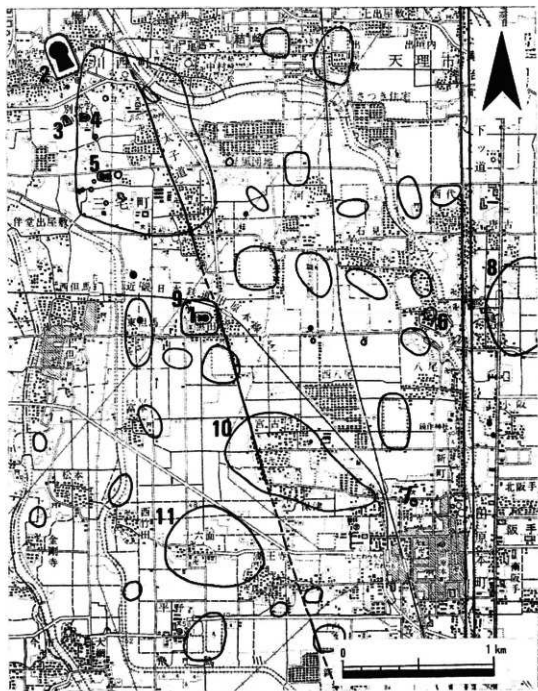
II. 古墳の立地と現状

黒田大塚古墳は奈良県磯城郡田原本町大字黒田小字東藪に所在する。この古墳の北北西2kmの間の微高地上には点々と小型の前方後円墳・円墳が存在し、三宅古墳群を形成している。黒田大塚古墳はこの古墳群の南端にあたる。また、三宅古墳群の東側には太子道が存在し、黒田大塚古墳のところでは東20m程の所を太子道が走っており、古道と古墳の関係が注目される。さらに、本墳の東2kmには鳥形・蓋形木製品、形象埴輪などを出土した石見遺跡が存在している。中世期においては本墳の西側に法楽寺が建立され、寺域内に古墳がとりくまれていたことが長祿三年(1459)の板絵画よりうかがわれる。この寺と本墳の関係は古墳の変遷を考える上で重要になろう。

調査前の本墳の現状は小高い墳丘部分を除いた周辺には客土による整地がなされており、平坦になっていた。しかし、数年前までは古墳の北側や南東側に堀が残存していたことが知られている。また、前方部北側には方形の張り出し部を墳丘測量図より認識することができ、さらに「奈良県の主要古墳1」の記載によれば、「墳丘の周囲は付近の水田面より一段高くなって」いたことがわかる。規模は当時で全長約55m、後円部径約28m、同高約6m、前方部幅約23m、同高約5mを計測している。墳丘は現状でみる限り、一段築成で墳丘斜面が急な古墳とみなされる。後円部頂上や墳丘の頂上部には盗掘穴らしき凹みが数ヶ所残っている。

注① 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』昭和10年

注② 白石太一郎「田原本町黒田大塚古墳」『奈良県の主要古墳1』昭和46年



- | | | |
|-----------|-----------|---------------|
| 1. 黒田大塚古墳 | 5. 高山古墳 | 9. 黒田遺跡・法樂寺跡 |
| 2. 鳥ノ山古墳 | 6. 石見遺跡 | 10. 保津・宮古遺跡 |
| 3. 寺ノ前古墳 | 7. 羽子田遺跡 | 11. 十六面・薬王寺遺跡 |
| 4. 安養院古墳 | 8. 唐古・鍵遺跡 | |

第1図 黒田大塚古墳周辺遺跡分布図

III. 調査の概要

調査はテニスコート場が設置される墳丘の北側を中心にトレンチ調査をおこなった。調査の目的として、1. 墳丘規模の確認、2. 周濠の有無、3. 前方部北側の方形張り出し部の性格究明の3点に重点をおいた。トレンチは5ヵ所で各々のトレンチで古墳の周濠と中・近世の溝を検出した。以下、各トレンチごと説明することとする。

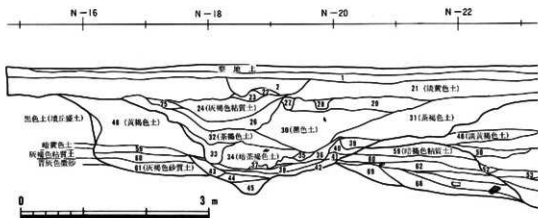
(1). 第1トレンチ

後円部東側の墳丘主軸線に平行して設定した幅3m、長さ26mのトレンチである。本トレンチでは古墳周濠の他、中・近世の大溝2条、中世の小溝5条、中世墓4基、土坑、小ピットを検出した。土層は20cm前後の現代整地土を含めて、表土から約1mにおよぶ近世以降の堆積土層がみられる。また、大規模な現代の塵芥処理穴がみられ、遺構の残存状況は悪い。

古墳周濠 トレンチ中央で検出した。周濠の立ち上がり部分が近世大溝Ⅰ、大溝Ⅱによって切られている為、その規模は明らかにしえないが、周濠底面で約5.6m、推定復元幅約8mを測る。周濠堆積土は約80cmで大きく二分層でき、上層は約40cmの灰褐色土層で瓦器などを含んでいる。下層は黒色粘土層で古墳時代から奈良時代の遺物を含んでいる。古墳時代の遺物としては円筒埴輪、須恵器杯身、土師器高杯、蓋形・鳥形木製品などがある。

中世墓 トレンチ西端で検出した中世墓群で計4基である。4基とも北東から南西方向に主軸をもつもので、各々切り合っており、南から北へ木棺墓が築造されたと思われる。これらには瓦器碗あるいは土師皿が副葬されていた。

近世大溝Ⅰ トレンチ西端で幅6m、深さ約1.6mの大溝を検出した。墳丘の立ち上がり部分に掘削されており、墳丘端を大きく削っている。本溝の堆積土は墳丘盛土層によって形成されているが、上層より滑石製の双孔円板が出土している。時期は近世初頭頃と思われる。



第3図 第2トレンチ西壁土層断面図 (S=1/60)

近世大溝Ⅱ トレンチ中央で検出した南北方向に軸をとる大溝で、幅約9m、深さ約1.5mを測る。本溝は周濠の外側立ち上がり部分に掘削されており、周濠を大きく破壊している。溝の堆積状態より二度の掘削がみられるようである。時期は近世初頭から後葉まで使用されていたようである。漆椀、曲物など出土している。

(2). 第2トレンチ

後川部北側で墳丘主軸線に直角に設定した幅3m、長さ14mのトレンチである。本トレンチにおいても古墳周濠と中世大溝1条、近世大溝2条を検出した。本トレンチの上層堆積は第1トレンチと同じ様相を呈している。トレンチの両端で検出した近世大溝2条は第1トレンチで検出した大溝Ⅰ、大溝Ⅱにそれぞれ対応すると思われる。

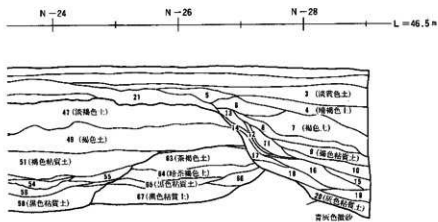
古墳周濠 トレンチ中央で検出したが、両側のたち上がり部が近世大溝によって切られており規模は定かでない。また、周濠の中央部には中世大溝が掘削されており、古墳周濠の堆積はごくわずかで遺物も少ない。周濠は推定幅約8mであろう。

中世大溝 トレンチ中央部で検出した幅3.8m、深さ1mの溝で東方向と北方向に分岐するところと思われる。遺物は瓦器・土師器などで比較的小さい。

(3). 第3～5トレンチ

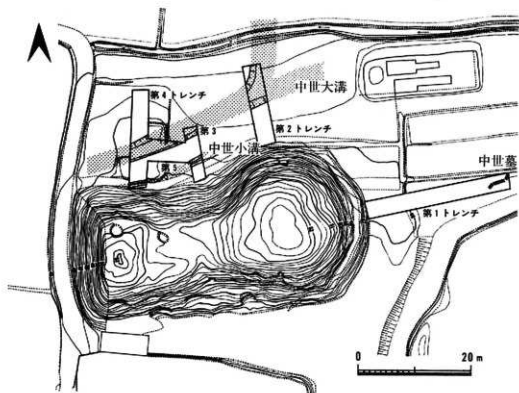
第3トレンチはくびれ部、第4、第5トレンチは前方形部北側の方形張り出し部に設定したトレンチである。各トレンチで中世、近世の大溝を検出した他、第4トレンチでは古墳周濠を確認した。また、現墳丘裾に沿うように中世の素掘溝(第3トレンチ)や近世後葉の小溝(第4トレンチ)を検出した。

古墳周濠 第4トレンチで検出したが、中世大溝と近世大溝Ⅰ・Ⅱによって切られているためその規模については明らかにしない。周濠は墳丘の基底部ラインから北へ現在11mあるが、外



土層と遺構の関係

- 近世大溝Ⅱ
3～20
- 近世大溝Ⅰ
22～45
- 近世整地土
46～49
- 中世大溝
50～58
- 中世墳丘カット上層
59～64
- 古墳周濠
65～68



第4図 中世遺構検出位置図

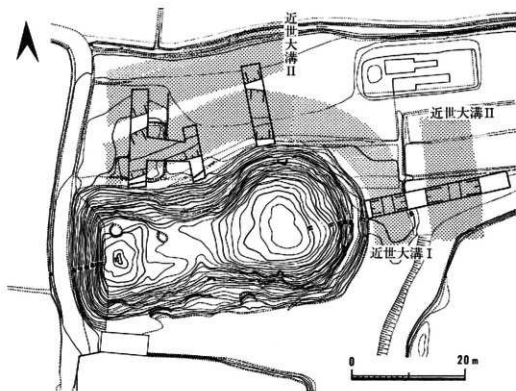
堤部は検出していない。周濠内の堆積は最も残りの良い所で60cmを測る。周濠底面は平坦である。墳裾から北へ約2.5mの所で鳥形木製品の頭部破片、蓋形木製品の完形品、板などの木製品と円筒埴輪を検出した。遺物は第1トレンチに比べて少ない。

中世大溝 第3、第4トレンチで確認した大溝である。上面が削平されているため、正確な規模は知りえないが、溝幅約3.2m、深さ0.7mを測る。堆積土は黒灰色粘土層である。第3トレンチでは紡錘車状の木製品が出土している他、瓦器等の土器類が若干出土している。

近世大溝Ⅰ・Ⅱ 近世大溝Ⅰは第3～5トレンチにおいて検出した。溝幅約4.4m深さ約1.5mを測る。墳丘基底ラインに平行するように走向している。第5トレンチでは陸橋部が設けられ、人頭大の丸石が飛石状に並べられていた。この陸橋部は古墳のくびれ部に当たる所であるがその性格については不明である。近世大溝Ⅱは第4トレンチで検出したが、溝北側の肩は調査外に及び、規模はわからない。現状では溝幅5.5m以上、深さ約2mを測り、大規模な溝である。

(4). 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は弥生土器・土師器、埴輪、須恵器、瓦器、陶磁器などで各時期の土器類がそろっている。最も多いのは埴輪であるが、これらの埴輪で原位置を保っているものは



第5図 近世大溝検出位置図

まったくない。古墳の周濠や中・近世の大溝の堆積土から多く出土した。土器類の他では木製品、石製品（滑石製管玉・双孔円板）が出土している。

埴輪 埴輪は多数の円筒埴輪と数点の蓋形埴輪がある。他の形象埴輪についてはわからない。図版7-1、2は第1トレンチの古墳周濠から出土したものである。1はやや楕円形を呈しているが、口径36cmを測る。外面には第1次調整の粗いナナメハケがみられる。ハケを施した後にタガを付けているが、タガは低く、粗雑な貼り付け方をしている。透孔は上から三段目に円孔を二つ穿っている。内面は板状工具によるナデが施されている。この埴輪は黒色粘土層内より出土したため、保存状態がよく外面の一部には赤色塗彩の痕跡がみられる。2も同様の成形・調整方法を施している。透孔は上から二段目と四段目にあけられている。外面には赤色塗彩がみられる。

木製品 図版8-1、2は蓋形木製品である。2は紡錘車状を呈する完存品で、下面径約46cm、上面径約17cm、高さ15cmを測る。中央には一辺約9cmの方孔が穿たれている。加工痕はほとんどみられない。上面は風化が激しく、木目が浮きでている。1もほぼ同形、同寸のものである。

図版9-1、2は鳥形木製品の頭部である。2は残存長約25cm、高さ約9cmである。頭部中央部が高くなり、円錐形を呈している。表面は風化が激しく、蓋形木製面と同じく木目が浮きでている。1はさらに残存状態が悪いが同形、同寸のものである。

IV. まとめ

黒田大塚古墳は盆地中央部の平坦地に築かれた古墳として古くから知られている。この地域には、島ノ山古墳を最大として、安養院古墳、寺の前古墳、茄子塚古墳、高山古墳、瓢箪山古墳、アンノ山古墳、天王塚、白山古墳等が、川西町・三宅町・田原本町の一町域に点在する。これらの古墳は寺川と飛鳥川に挟まれた微高地にある。現在確認できる古墳はそれ程多くないが、この周辺では田畑の内から埴輪が出土することがあり、かつては多くの小規模な古墳があったものが削平され、中・大規模の古墳のみが残り、今みるような状況になったものと思われる。これらの古墳群は屯倉（三宅）の地域の古墳として認識されているものの、学術的な調査が実施されたことがなく、その実体については明らかでなく、断片的な資料についても非常に少ない。このような現状にあって黒田大塚を調査することは重要な意味を持つてくるとともにその成果についても大いに期待されるものがあつた。

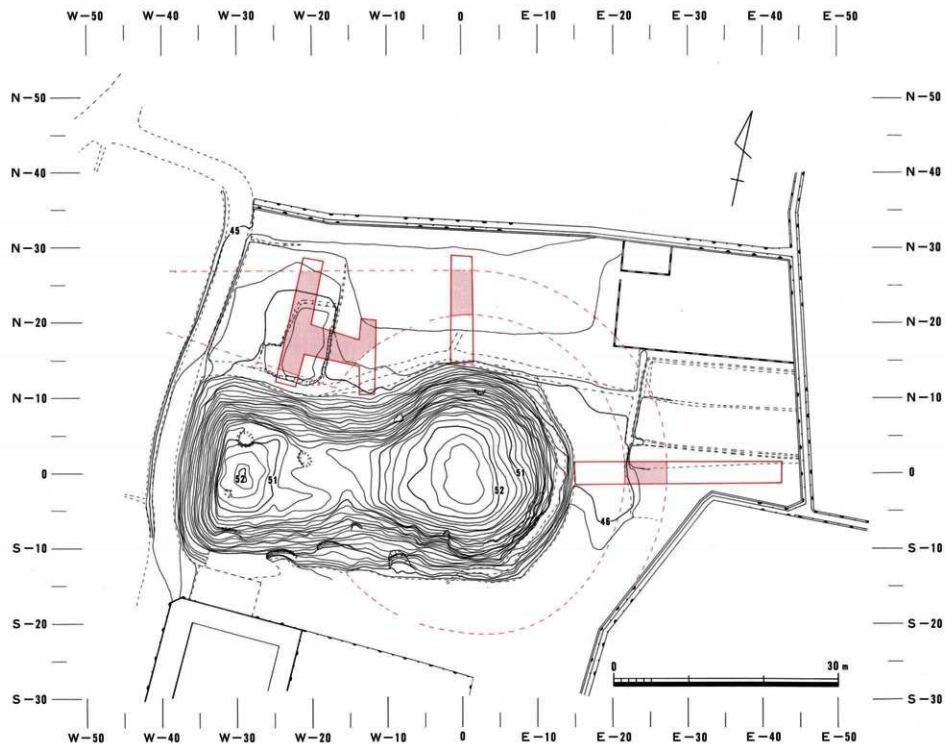
今回の発掘の直接的な動機はテニスコート設置のための事前調査であつたが、将来に予定されている内部の調査のための予備調査としての意味も含んでいる。

調査範囲は狭かつたにもかかわらずその成果は大きいものがあつた。大別すると二つの問題があつた。その一つは中・近世の溝の問題であり、他の一つは古墳自体の問題である。

中・近世の溝については大きく3条が検出されているが、それぞれ時期が異なり、本来一本の溝が時代によりその位置を変えたものとみられた。この溝がどのような性格のものか判明していないが、黒田村を囲む環濠である可能性も考えられる。また隣接して西側に、法楽寺があることから寺域に関係する溝であるかもしれない。いずれにしろこの溝が古墳の濠と重複した位置にあることはもともと濠の痕跡のある部分を利用して溝が掘削されたものとみられる。

黒田大塚古墳には、これまで周濠が存在するとされてきた。この想定は古墳の周囲にある畦をたどることによって想定したものであるが、今回の発掘によって実際に濠が確かめられた。

しかし濠の位置はかならずしも畦等に一致した部分から検出されなかつた。濠の正確な形は発掘地点が限られていたこと、また後世の遺構が濠を削平していたことなどから実際にはわからないが釣鐘形を呈するものであると考えられた。深さが1メートル程度で幅8メートルの比較的幅の広い濠であることが判明した。周濠の調査は県下でもあまり調査例がなく、古墳の形・規模等の決定のための重要な資料となろう。濠の内部からは埴輪、須恵器、木器等が出土した。このうち埴輪と須恵器の発見は当古墳が六世紀前半に築造されたことを示すもので、これによって黒田大塚の具体的な年代を決定することができた。木器の内には蓋形木製品と鳥形木製品と呼ばれるものがある。これまで学術調査でこの種の遺物が出土しているのは同じ田原本町の石見遺跡や高取町市尾臺山古墳等があるが今回出土のものは保存状態が良く、尚かつこれまでのものより大きい。これらの遺物の性格について尚検討を要するが、これまで言われているように鳥とその台とする考え方が妥当であろう。古墳築造時にこのような木製品が墳丘のまわりめぐらされていた風習がかなり一般的におこなわれていた可能性が強い。このような鳥形を立て並べる風習は墓に限らず弥生時代からあつたらしいが、中国南方を含めた東アジア的な視野で理解する必要がある。



第2図 黒田大塚古墳墳丘測量図及びトレンチ配置図 (S=1/500)

黒田大塚古墳

図 版



a. 空中写真 (上が北)



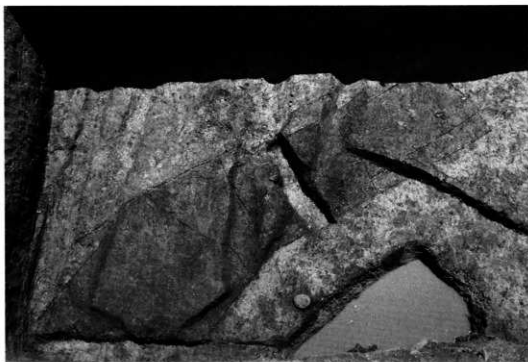
b. 調査前の旧状(北西から) (昭和40年頃)



a. 古墳周濠全景 (東から)



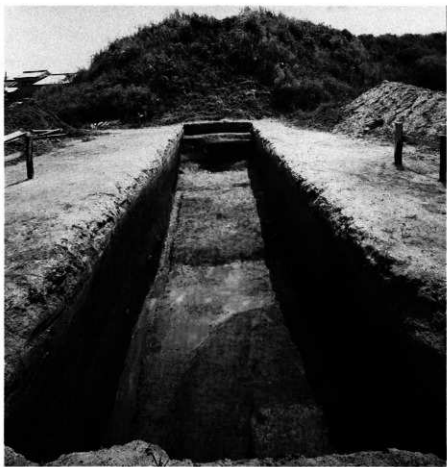
b. 古墳周濠 遺物出土状況



a. 中世墓検出状況



b. 中世墓遺物出土状況



a. 中世大溝・古墳間濠全景（北から）



b. 第2トレンチ 西壁土層堆積状況



a. 第3・4・5トレンチ全景



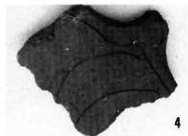
b. 第5トレンチ 近世大溝I陸橋部



a. 第4トレンチ全景（北から）



b. 古墳周濠木製品出土状況

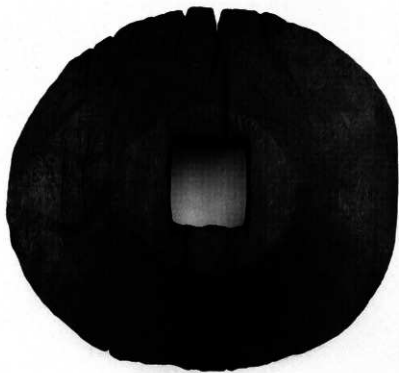


1. 2—円筒埴輪 (古墳周濠)

3. 4—蓋形埴輪



1



2

1, 2 - 蓋形木製品 (古墳周濠)



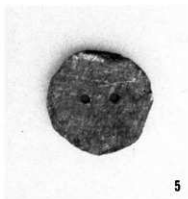
1



2



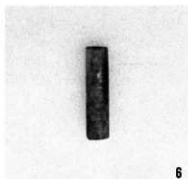
3



5



4



6

1, 2 - 鳥形木製品 (古墳周濠) 3 - 曲物底板 4 - 紡錘車狀木製品 (中世大溝)
5 - 双孔凹板 6 - 管玉

田原本町埋蔵文化財調査概要 2
—昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・
19次発掘調査概報 黒田大塚古墳
第1次発掘調査概報—

昭和59年3月31日

発行 田原本町教育委員会
印刷 関西美術印刷株式会社

